

第三章

36

「……なるほど、事情はわかった」

コーデリアが渋い顔でそう言った。第一ミルチア城からそう遠くない、ここはブラックナイツの屯所にあるコーデリアの私室。ネッコ達は椅子に腰掛けている。ライオネルの片足には痛々しく包帯が巻かれていた。メルフィナがその上から回復魔法をかけている。

「わかっただろ。僕達は地下の洞窟を彷徨ってたら偶然ここにたどり着いただけなんだ。さあ、今度はそっちが話してくれ。なんで十三使徒なんて伝説の化け物があそこにいたんだ！」

ネッコがコーデリアに食い掛かるように言った。

「馬鹿らしい。本の読みすぎだ。十三使徒なんて化け物が実在するわけあるまい。あんなものはただの伝説だ。さきほどの老剣士も十三使徒の名を語っただけだろう」

そう言うコーデリアだったが、顔は深刻そのものだ。

「本物にせよ偽者にせよ、あの爺さん相当な腕だぜ。ライオネルに傷負わせちゃうんだからな。ただの人間じゃないことだけは確かだ」

ロアが言う。ライオネルという名を聞いてコーデリアの表情が変わった。

「ライオネル！　あなたが、あのダイーシャン、ライオネルですか」

コーデリアが目を見張って言う。彼女もライオネルの戦功を聞いたことがあるのだろう。しかし、ライオネルは答えない、黙って椅子から立ち上がった。回復魔法をかけていたメルフィナが眉を上げる。

「メルフィナ殿、助かった。もうよい。私はエレイン様を探しに行く」

「無理です。出血は止まりましたが、まだ完全に傷は塞がってません」

「そうです、ライオネル殿。それに町に出てもすぐ捕まってしまう。おそらくあなた達を捕らえようとした兵はアルテオムの配下の者達でしょう。町にはアルテオムの息のかかった兵士や諜報員がそこらじゅうにいます。五分とたたないうちに町の警備兵に囲まれます」

メルフィナに続いて、コーデリアもライオネルを止める。

「心配無用だ」

ライオネルの言葉は断固として揺ぎ無い。

「それなら僕達も行く。エレイン姫とは僕達も無関係じゃないんだ」

「足手まといだ。君達はここにいろ」

ネッコの言葉を冷たく遮ると、ライオネルはコーデリアの部屋から出て行った。

「あーあ、いっちゃたよ」

ロアが呆れた様に言った。

「しかし、そのアルテオムという人が本当に十三使徒と繋がっているとしたら大問題ですよ。エレイン様誘拐もありますし、レオグランスを初めとする諸国が黙っていないでしょう。下手をすれば人間、魔族入乱れた大戦争になります」

メルフィナの言葉を聞いて、コーデリアの顔に苦渋が満ちる。

「とにかく、君達はこのにいる。ここなら私の部下ばかりだからアルテオムの手は及ばん。私はアルテオムと会って話をしてくる」

「本当にアルテオムって奴が犯人なら、あんたも危ないんじゃないか？」

「私一人で行くわけではない。私のブラックナイツの兵を連れて行く。それにブルーナイツの隊長トランともな。この男は信頼できる。私が軍でアルテオムに詰め寄って真相を問いただしてくる。私が戻るまで勝手に出て行くなよ」

コーデリアはそう言って部屋を出て行った。

「どうする？」

ロアが聞く。

「どうするって……とりあえず此処にいたほうがいいだろうな。今動いてもミルチアの兵に捕まって終わりだ」

「それがいいですね。エレイン様とライオネルさんの事が心配ですが、しばらくはここで様子を見守りましょう」

ネツコとメルフィナが答えた。

「そっか……」

ロアが頭を抑えて呟く。

「急にどうしたんだ、暗い顔して。お前らしくもない。頭でも痛いのか？」

ネツコが聞く。

「……いや、ここに着てから妙な感じがするんだ。不安な胸騒ぎがする……それでいて妙に懐かしい……この感じは……まさかな……」

ロアが暗い顔で窓から第一ミルチア城を見た。

コーデリアとブラックナイツの千の騎兵は馬を駆けてブルーナイツの屯所に向かった。軍勢は外に置き、コーデリア一人で屯所に入る。そうしてトランの部屋までやって来た。

「トラン、すまないがすぐに兵を集めて私と共にきてくれ。王が殺されたのはお前も聞いただろう。考えたくないことだが、私の考えがもし当たっていればアルテオムはこの国の乗っ取りを企てている。それだけは何としても阻止せねばならん」

部屋に入る早々、トランに声をかけるコーデリア。しかし、トランはコーデリアの話を聞いているのか聞いていないのか座ったまま遠い目をして壁を見つめている。

「聞いているのか、トラン！ 一刻の猶予もないのだ！」

「……ああ……」

トランが力なく答える。コーデリアの方を向きもしない。

「……どうしたのだ？体調でも悪いのか？」

「……心配は要らない……」

「おい、どうした。しっかりしろ、トラン！」

コーデリアがトランの肩を掴んで揺さぶる。トランは力なく、人形のように首がガクガクと揺れた。その口の端から唾液が垂れ落ちる。コーデリアがトランの顔を覗き込んだ。顔は真っ青で、その目は焦点が合っていないどころではない、瞳孔が開いていた。コーデリアは驚いてトランの肩から手を離す。トランの首が力なくガクリと垂れた。

「……何も心配は要らない……何も心配はいらないんだ……コーデリア……」

「誰か！ 誰かいなか！ トランが……」

コーデリアが部屋を飛び出す。その外には多くの兵士達が規則正しく仕事をしていた。ただ、何かおかしい。恐ろしく静かなのだ。人の声一つしない。兵士達の顔には血の気がなく、その目はどこか遠くを見つめているようだった。

「……なんだ……これは……いったいどうなっているんだ……」

コーデリアは背筋に震えを覚え、その場に立ち尽くした。

第一ミルチア城の一室、アルテオムが自分の部屋でゆっくりと椅子に腰掛けた。さすがに疲れているようだ。王を暗殺してからここ数時間、城の兵士達を指揮して事後処理に当たってきた。それもようやく落ち着いていた。すべて計画通りうまくいった。王暗殺の犯人は仕立て上げた。王

に子供はいないし、後釜につけるほどの有力な貴族や軍人も見当たらない、クラモリ王信賴を得ていたアルテオム一人除いては。

「うまくやったようだな」

アルテオムの背後から突然声が掛かった。

「黙って入ってくるとは礼儀を知らんな、ボールス」

アルテオムが振り返りもせず言った。

「この国にお前の持つ軍勢と機甲虫に対抗できるほどの戦力を持つ者も見当たらん。これで貴様はミルチアの実質的な指導者になれるというわけだ」

「魔界の方はどうなっている？ 今、魔族に人間界に攻めてこられたら我々の計画はおしまいだぞ」

「順調だ。しばらく人間界に大規模な攻撃を仕掛けてくることはない。モードレッドもトウオンもそれどころではないからな。魔界が混乱しているうちに人間界を制圧してしまえ」

「わかってる。そういえばブルーナイツをまるごと吸血鬼にしまったそうだな。そんな事は聞いてないぞ」

「ふふ、貴様に反抗的な者達と聞いていたのだな。ちょっと手助けしてやっただけだ」

「余計なことを……」

「戦力としては当てになるぞ。少なくともただの人間なんかよりは遥かにな。貴様の命令に従うようにしておいた。好きに使うがよい」

「ふん、それより今日は何の用だ？」

「なに、ちょっとラウドに用があつてな。貴様のもとに寄つたのはついだ」

「ならもう行け。私はまだまだやることが山のように残っているのだ」

「そうしよう」

ボールスは笑つてアルテオムの前から消えた。

「捕まえたそうだな」

第一ミルチア城のラウドの部屋。ボールスとラウドが座っている。

「ああ、地下牢に幽閉しておる」

ボールスの問いにラウドが答える。

「エクスカリバーは？」

「ここに」

ラウドが一振りの剣を差し出す。まさしくエレイン姫が腰に帯びていた聖剣だった。ボールスは受け取つた聖剣を見つめる。

「エレイン姫の血液サンプルも取つておいた」

ラウドが懷から血の入つた試験管を取り出す。ボールスが聖剣を下ろし、震える手で試験管を掴んだ。今にも試験管を握り潰してしまいそうだ。

「ふふ、ふはははっ！ すばらしい！ これだ！ これさえあれば私は吸血鬼、いや魔王も勇

者も超えた地上で最も優れた生物へと進化できる！」

「ミルチアは制圧した、血液サンプルは手に入った。あとは貴殿の研究の完成を待つだけだな」

「任せておけ。サンプルさえ手に入ったら解析するのに時間は掛からん。すぐに研究は完成する。欲を言えば魔王モートの血も欲しかったが、こればかりはどうしようもないからな」

ボールスはまだ血液の入った試験管を見つめていた。

「エレイン姫はどうする？」

「そのまま地下牢につないでおけ。まだまだ研究したい個体だからな。だが今ミルチアからエレインを連れ出すのはまずい。アルテオムに気付かれる。アルテオムの手が及ばんように見張りだけ付けておけ」

「わかり申した」

ラウドは頷いたが、同時に怪訝そうな顔をした。

「そういえば……エレイン姫を捕らえる時、妙な者と会ったぞ。一瞬だったが貴公と同じ匂いがした。あの者は間違いなく吸血鬼だ」

「吸血鬼だと……ふはは、そうか。ずいぶん懐かしい感じがすると思っていたら、あの男もこのミルチアに来ているのか」

「あの男？」

「くくくつ、お前が気にする必要はない。別にとるにたらん男だ。私の個人的な事だな」

「……？」

「今度その男と会う事があったら殺してかまわん。ただ殺す前に一言伝えておいてくれ。記憶を取り戻せなくて残念だったとな」

「……我が輩には何のことかわからんが、わかり申した」

「さて、そんなことはどうでもいい。それよりさっそく私はここの私の研究室でこの血液の解析を始めるとする」

「魔界の貴殿居城、ネグロードには帰らんのか？」

「魔界は今騒々しいからな。モードレッドに戦力の催促などされては落ち着いて研究してられん。ここのほうが静かでいい。しばらくはこの第一ミルチア城にいる。お前は引き続きアルテオムの監視を頼む」

「うむ」

ラウドが頷く。ボールスは再び自分の手にある試験管を見つめた。

「くっくっつ、はーはっはっは」

ボールスは高笑いをしながらラウドのもとを去った。

「まったく、誰の馬鹿笑いかしら。五月蠅くって仕方ないわ。集中できないじゃない」
リユネットが手を動かしながらぼやいた。

「……リユネット殿、さっきから何をしておるのだ」

同じ牢にいるロットがリユネットに聞いた。

「見てわからない。ヤスリで鉄格子切ってるのよ」

何処に隠していたのか、リユネットは手に持った鉄のヤスリで鉄格子を擦っていた。

「そんなめんどうな事しなくても貴殿の魔法で何とかならないのですか？」

ガウエインが怪訝そうに言う。

「あーっ、もう。馬鹿は黙ってなさい。この鉄格子や壁は特殊な金属でできていて魔法じゃ壊せないのよ」

「しかし、そんな小さなヤスリじゃ鉄格子切るのに何日掛かるか……」

「五月蠅いわね、それしか方法がないから仕方ないじゃない」

リユネットが大声で怒鳴る。

「ちよっと、隣の方。少し声の音量下げてもらえませんか。それに何をしてらっしゃるか知りませんけど、さっきからギイギイ何か削る音がして五月蠅いんですけど」

リユネットの隣の房から女性の声が聞こえる。

「あー、悪かったわね。あと三日ぐらいで終わるから我慢しなさい……ってその声はエレインの馬鹿王女！」

リユネットがヤスリを放り出して房の壁に詰め寄った。

「あら、そういう下品な声のあなたはリユネットですか。ずいぶん変わった所で会いますね」

「あーはっはっは、地下牢に入るなんていい気味ね、エレイン」

「そういうあなただって同じじゃないですか。それに相変わらず五月蠅い方ですね。静かにしないで、助けが来た時疲れていては脱出できませんよ」

「助けなんて来る訳ないでしょう！ 誰も私たちがここにいるなんて知らないんだし、大体この警備の厳しい地下牢までどうやって来るの」

「来ますよ。ライオネルは必ず来ます」

「……ライオネル？ ああ、あのあなたのお守り役ですか。確かにあの男なら……」

「心配しなくてもライオネルが助けに来た時、貴女だけは地下牢に残していつてあげます」

「きーっ、いちいち一言多い女ね」

そう言いながら壁をガンガン叩くりュネットを押しつけてロットが近づいた。

「エレイン様。ロットです」

「あら、英雄騎士ロット？ あなたみたいな方がなぜここに？」

「話せば長くなります。それより、本当に助けは来るでしょうか？」

「……たぶん。私がこの国に捕まっていることはライオネル達は知っていますから」

「しかし、正確にここだとは知らないでしょう？」

「……ええ」

「なら、残念ながら助けが来る可能性は低いと考えるべきでしょう。我々だけでなんとか脱出の手段を考えなければなりません」

「……そうかもしれません。しかし、そんな事が可能でしょうか？」

「今は機会を待つことです。かならず脱出の機会は訪れます。それまで大人しくしておきましょう」

「わかりました。英雄騎士ロット、貴方にお任せします」

エレインは静かに言った。

第一ミルチア城の城下町では厳戒態勢が引かれていた。いたるところに警備兵の姿が見える。クラモリ王殺害の報せはまだ町の人々までには知らされていなかったが、第一ミルチアの市民達は重大な何かが起こったことを感じ取っていた。露店をかたづけ、家路に急ぐ商人達も見える。

「市民達も何かただならぬ事が起こったと感じ取っているようですな」

街路の中心を歩いている鉄の兜と槍を持った五人の兵士。その中の兵士の一人が隣の中年の兵士に語りかけた。となりの男はピカピカに磨かれた銀の胸当てと徽章を付けていた。警備隊の小隊長といったところだろう。

「ふん、愚民どもは事が起こった時はあれこれ騒ぐものだが、事が定まれば静かに従うものだ。今はクラモリ王が死んで一時混乱しているが、アルテオム様が王になればすぐに大人しくなる」

「やはり次の国王はアルテオム様でしょうか？」

「決まっているだろう。他に誰がいる。今このミルチアの軍事を握っているのはアルテオム様だし、国王暗殺の事態を收拾したのもあの御方だ。私には一目見たときからあの御方は人の上に立つ者だとわかっていたよ。あの方の下についていてよかった。すぐに昇進できるぞ。いずれ一騎士団の団長も夢ではないかもしれん」

「おめでとうございます」

「しかし、つまらん仕事だな。命令だから警備の兵は増員したが、街中で騒動など起こりようもないだろう」

「アルテオム様の命では異国の者を見かけたら誰であろうと捕らえよとのことですが」

「この大勢の市民の中からどうやって異国の者を見分けろというのかね……」

小隊長はそう言って辺りを見回した。前から歩いてくる一人の男が目に残まる。黒いフードで顔を隠してはいるがわずかに見えたその瞳は灰色。顔つきを見てもミルチア人とは思えない。

「おい、あの前にいる男どう思う。あの黒いマントとフードの男だ」

「怪しいですね。それにどうやら腰に剣も帯びてるようです」

「よし、呼び止めるぞ」

小隊長が部下にそう命じる。しかし、男は小隊長から十メートルといったところで、街路から横に伸びている細い路地に入った。

「路地に入ったぞ。見失うな」

小隊長が走り出す。慌てて兵士達も走り出した。

「妙だぞ。何処に行った？」

路地を曲がってしばらくしたところで小隊長が後ろからついてくる兵士に言った。しばらく路地を走ってきたが男の姿は見えない。ついには袋小路に行き着いてしまった。路地に横へ逸れる道はなかった。男は何処に消えたのだろう。

「くそっ、感づかれていたか。逃がしてしまったようだな」

小隊長が目のある行き止まりの壁を見て呟いた。頭上でバサツと音がする。小隊長が何気なく後ろにいる兵士達を振り返った。其処には倒れてこときれている四人の兵士。そして血に濡れた剣を持った黒いマントの男。ライオネルだった。フードからのぞく顔は恐ろしく冷たい。小隊長は恐怖で動くこともできず、目だけを斜め上に向けた。其処には二階建の長屋の屋根が見える。男はその屋根に身を隠し、其処から飛び降りたのだろう。

「ば……馬鹿な……剣の触れ合う音はもとより……ひ、悲鳴も聞こえなかったぞ……そんな一瞬で四人も殺してしまうとは……」

小隊長がなんとか喉から声を絞り出した。震える手で腰の剣の柄を握る。ライオネルが無造作に近寄って来て片腕を小隊長に伸ばす。筋肉の盛り上がった鋼のような腕だった。小隊長には無造作に見えた動作だったが、その動きは早かった。ライオネルは小隊長の首を掴み、そのまま壁に叩きつけた。小隊長は壁とライオネルの腕に挟まれ、地面から足が離れていた。

「う、うげっ……」

小隊長が首を苦しうにうめく。首が折れるかと思うような握力だった。

「……答えろ。アルテオムは今何処にいる？」

「ア、アルテオム様……？」

ライオネルが腕に力を込める。小隊長の首の骨が音を立ててきしんだ。

「し……し、城……こ、この……第一……ミルチア……城、に……」

ボキリと音を立てて小隊長の首の骨が折れた。ライオネルが手を離す。ガクリと首をうなたれ地面に落ちた。

「……アルテオム」

小隊長に目もくれず、遠くにそびえる第一ミルチア城を見つめるライオネル。古い記憶が思ひ出される。

あれは十年前、境界地域に魔族の侵攻があった時だった。ライオネルは当時すでにエレインの護衛隊長だったが、緊急事態につき北方遠征のレオグランス総大将に選ばれた。アヴァロン王の血縁の貴族を押しつけての異例の拔擢だった。二十年前の魔族との戦いの戦功とアヴァロン王の信頼の証だった。

ライオネルが境界地域に着くと、そこにはアトラース各国の軍が集まっていた。その中にアルテオムの姿もあった。彼は各国が資金を出し合って集めた傭兵部隊の一部隊の隊長だった。最初、アルテオムを見た時、ライオネルは彼にそれほどどの関心も持たなかった。歳もライオネルより遥かに若く、当時はまだ十代だったかもしれない。傭兵部隊の隊長ながら体格も優れているわけがなく、見た目は優雅な貴族のようで実践で戦った事も無いように見えた。しかし、

何度も同じ戦場で戦う内にライオネルのアルテオムに対する認識は変わった。剣技も魔法も天才的、なによりその指導力は傭兵部隊の一隊長に収まるような器ではなかった。無口で実直な武人であるライオネルと対称的に、アルテオムは本場の貴族のようで外交力に長け、その境界地域での戦争を機に幾人もの各国の有力貴族と交友関係を結んでいた。

アルテオムとは何度が親しく話をしたが、その時に一度こんな話を聞いた。自分は傭兵隊長などで終わるつもりはないと。この度の戦争に参加したのも各国の貴族に名前を売って仕官の種を探しているのだと。

魔族を撃退して境界地域での戦争が終わると、ライオネルはキャメロンに帰り、その後アルテオムと会うことはなかった。ここ十年アルテオムの名前を耳にしたこともない。それがこのミルチアの国ですでに実権を握るまでになっているとは。

ライオネルはゆっくりと歩き出した。路地を抜け、人ごみの中を第一ミルチア城に向かって歩いていった。

立ち上がったトランがコーデリアを襲う。右手を翳すトラン。それを、コーデリアに向かつて振り下ろす。抜いた剣でそれを受けるコーデリア。受けたと同時に、もの凄い衝撃がコーデリアを襲う。

「くう……！」

右足でトランを蹴り飛ばし、距離を取るコーデリア。

「トラン！　どういふことなの？説明しなさい！」

「素晴らしい、素晴らしい力だ。コーデリア、素晴らしいぞ！　吸血鬼というのは実に素晴らしい力だ」

「吸血鬼……！？」

再び地面を蹴り、コーデリアに仕掛けるトラン。その攻撃を、剣で受けるコーデリア。

（なんて馬鹿力なの……！）

コーデリアが、もう一度トランを蹴り飛ばそうとした時、トランの左の拳が、コーデリアの腹に直撃する。

「はう！」

後ろに吹っ飛ぶコーデリア。壁に激突し、そのまま地面に倒れる。

「死んだかな？死んだかな？ダメだなあ。もう少し楽しませてくれないと」

笑いながら言うトラン。そのままコーデリアに近づいてくる。

「さてさて、じゃあ完全なる止めを……」

「……黙れ！」

よろりと立ち上がるコーデリア。

「ほう……流石は若くしてブラックナイツを率いる女隊長だ。この程度では死にはしないか」

「トラン、あなたに恨みはないけれど……いえ、あなたはもうトランじゃない。魔物として、

ここで成敗します」

「成敗ねえ……だが、見ただろう？私のこの力を！ どうあがいても、お前に勝ち目はないの

だぞ？ いったいどうする気だ」

トランの問いに、黙り込むコーデリア。呆れた顔で、トランは首を二、三度横に振り、もう

一度地面を蹴る。

「来い！ ティティス！」

コーデリアが叫ぶ。すると、壁を突き破って、一等の馬が飛び込んでくる。そのまま、トランに体当たりをし、彼を吹っ飛ばした。

「な……う、馬……馬！？ 馬がなんで！」

「お前と同じ、吸血鬼だよっ！」

コーデリアはティティスに飛び乗り、備えてあった槍を手取る。トランは立ち上がり、再び大地を蹴る。

「悪く思ふな！ トラン！」

外ではブラックナイツと、吸血鬼と化したブルーナイツ達が交戦していた。

「なんなんだ、こいつらは！」

「間合いを取れ！ 囲まれるな！」

「レキ隊長はどうなったんだ！」

次々に叫ぶブラックナイツ。容赦なく攻撃を仕掛けてくるブルーナイツの吸血鬼達。そこへ、ティティスを駆って、コーデリアが壁を突き破り、出てくる。

「カイル、フォルデ、フランツ、生きているか？」

周りの吸血鬼をなぎ倒しながら、コーデリアが叫ぶ。

「はっ！」

「ここにいますよ」

「なんとか生きてます」

順々に言う三人。

「よし、お前達は、他のエーデルリッターにこの事を伝え、第一ミルチアに召集するように呼びかけろ。他の者は退却だ！ 私がしんがりを勤める。急げ！」

「……遅いですね。やはり何かあったんじゃないかしら」

窓から外を見ながら、メルフィナがポツリと呟く。

「お、帰ってきたぜ」

ロアが言う。外を見てみると、ブラックナイツの騎馬隊が、こちらに向かって走ってくる。

コーデリアは扉を開け、中に入った。それを見たメルフィナが、顔色を変え、コーデリアへと駆け寄る。

「どうしたんですか……この傷」

「なんでもない……」

「なんでもないですよ！ さあ、こちらへ」

コーデリアに肩を貸すメルフィナ。フラフラと個室の方へと歩いていく。扉を開けると、メルフィナは振り返り、ロアたちのほうを見る。

「男子禁制ですよ！」

そう言って、扉を閉めた。

「言われなくたって、みねえつつうの。なあ、ネツコ」

「あ、ああ。だけど、一体何があったんだろう？」

「今の傷……人間相手のものじゃないわね」

ロアとネツコのやりとりを、傍で見ていたアムリタが呟く。

「人間相手じゃない？魔物でもでたのか？」

「鎧の腹部のところが割れていたわ。斬られたような傷ではなかったし、人の力で、あのよう
に鎧をあんふうに割るには、相当の力が必要よ」

アムリタが言い終えると、個室から二人が出てくる。

「ありがとう、だいぶマシになった」

「なあ、何があったか説明しろよ」

出てきたコーデアに言うロア。

「そうだな……」

——第一ミルチア城内部。

「アルテオム様、王となられるための儀式が、三日後に決定致しました」

椅子に座るアルテオムの前に立ち、大臣がそう告げる。

「ふむ、後一詰めだな……」

「何がでしょうか？」

「いや、こちらの話だよ。三日後の儀式のあと、あの暗殺者どもを公開処刑にする。そちらの
準備もしておけ」

「公開……ですか？」

「そうだ。それにより、異国の脅威を民に伝え、異国に対する戦意を兵に与える」

「なるほど……わかりました。それでは失礼します」

一礼し、その場を後にする大臣。

（フフ……これで王は異国の暗殺者に殺されたという意識が民や兵たちに浸透する。さらに、異国への侵略の理由付けにもなるわけだ）

「また、何をニヤニヤしておるのだ」

「ラウドか。今度は何用だ？」

ラウドの方を振りも返らずに言うアルテオム。

「装甲蟲の準備はどうだ？」

「順調だよ。すでに、一国を攻め入るだけの数は用意している。試作機も何機か用意しているしな……」

「なにやら不穏な動きもあるようだ……？」

「コーディリア・レキか。フ……小娘が。安心しろ、ブラックナイツはおろか、エーデルリツターが動いたところでどうにもならんよ。それに、奴らはもともと私の構想からは外れているのだから」

「ブルーナイツが全員吸血鬼になってた！？」

コーディリアの説明を聞き、驚きの声をあげるネツコ。

「ありえない！ 数百の兵を……」

「簡単だ。数人吸血鬼にしちまえば、後は派生してくだけさ」

ネッコが声をあげる中、ロアが静かに答える。

「問題は、敵に吸血鬼がいるってことね」

アムリタが言う。その言葉に、メルフィナとコーデリアがうなずく。

「ああ、考えたくはなかったが、もしかしたら、奴が……」

「ん？ 奴って誰だよ。知り合いなのか？」

ネッコがロアに問う。だが、ロアはその問いには答えず、神妙な面持ちで何かを考え込んでいる。

「ボールス……」

コーデリアが、誰に言うでもなくつぶやく。その名前に、ロアが眉をひそめる。

「まさか、本当に実在するとは……アルテオムが魔族と関わっているなどと、まさかとは思ってたが、十三使徒と接触がある可能性がでてくるとはね」

「それよりさ、なんで君はそんなに固執するんだ？ 嫌なら、とっとと軍を辞めて、レオグランズにでもいけばいいのに」

「先代王よりブラックナイツの隊長に任命されて、ミルチアに忠誠を誓ったんだ。王がクラモリ様になっちゃって、ミルチアも変わってしまったが、私の忠誠は揺るがない。だが……いや、だからこそ、あのアルテオムのような、どこの馬の骨かわからん奴に、これ以上ミルチアを荒らすわけにはいかないんだ」

「すべての根源は、そのアルテオムにあり、といったところでしょうか」

「ああ、異国の暗殺者が、クラモリ王を殺したと言っているが、私は奴がすべてやったと考えている」

コーデリアは、そう言いながら拳を握る。

「とにかく、僕らもできることがあったら協力するよ。ライオネルや、エレイン姫の事も心配だしね」

黙っているコーデリアに、ネツコが言葉を掛ける。

「俺もだ。奴がいる可能性があったら……とにかく、今のところは協力させてもらうぜ」

「私も、及ばずながら手をお貸しますよ。アムリタも」

ロアに続き、にっこりと微笑みながら言うメルフィナ。

「なんで私が……」

「あら、ダメですよ。仲間なんだから、一緒に戦わないと」

「仲間……」

メルフィナの言葉に、黙り込むアムリタ。

「これはミルチアの問題だ。第一、危険すぎる」

「大丈夫だって、そこの兵士なんかより、よっぽど役に立つだろうし」

反対するコーデリアに、当然のように返すロア。

「私たちにも、気になるところがあるんですよ。どうか、聞き入れてください」

「……わかった。そこまで言うなら止めはしない」

少し考え込んだ後、コーデリアはそう言って立ち上がった。

——ブラックナイトの屯所の一室、コーデリアの部屋。

そこでは、ロア、ネッコ、メルフィナ、アムリタの四人が、コーデリアの帰りを待っていた。
「うーん、暇だ」

ロアがうめく。

「外では大勢がばっさばっさ切り合いやってんのに、どうして俺たちだけが留守番なわけ？」

ロアが言う通り、外からは大勢の兵士達が吸血鬼と化したブルーナイトと交戦を繰り返している。剣と剣がぶつかり合う金属音や断末魔の声が外から聞こえ、はっきり言って穏やかな環境ではない。

コーヒーを淹れながら、メルフィナが言った。

「……チャンスを待っているんですよ。吸血鬼化したブルーナイトを相手にエーデルリッターが集結しつつありますから、その戦乱が一層激しくなったときに、私たちが第一ミルチア城へ侵入してエレイン様を救うんです。ロア、コーデリアさんの話ちゃんと聞いていましたか？」

ロアは両手を頭の後ろで組み、椅子でシーソーをし始めた。ぎしぎしと椅子の軋む音が響く。

「だったら、別にコーデリア待つ必要ないだろ。適当に判断して俺らだけで突入すればいいんだよ」

「コーデリアさんならミルチア城の安全な侵入ルートを知っているでしょうし、そもそも彼女自身にもアルテオムの悪事を暴くと言う重大な使命があるのですよ。吸血鬼……その存在があるということは、アルテオムはポールスと関わりあっている可能性が非常に高い。もしそれをブルーナイツに関連付けて暴くことができれば、アルテオムは失墜を免れません。彼女にとっても、この一件はミルチアを救う大事なチャンスなんですから」

メルフィナの言葉を聞きながら、ロアはほお杖をつき、いじけた子供のように口を突き出した。

「はい、できあがり」

メルフィナはお盆にコーヒーを四つ乗せ、ロア、ネッコ、アムリタの座るテーブルにまで運んだ。

「おーサンキュー」

「……頂くわ」

ロアとアムリタが言った。しかし、ただ一人ネッコだけは、カップの中のコーヒーを覗きながら浮かない顔をしている。不思議に思うメルフィナ。

「ネッコ、どうしました？虫でも浮いてます？」

「……すまない。せっかくだけど、僕はコーヒー駄目なんだ。コーヒーを飲むとお腹がび

みよーに緩くなって」

すまなそうなネツコの言葉を聞き、けたけたと笑うロア。

「うるさい。笑うな」

ロアは腹からこみ上げてくる笑いを堪えながら、砂糖を二杯コーヒーに入れた。ロアに続いて今度はアムリタが、一杯、二杯、三杯、四杯……と、最終的にさじ六杯もの砂糖をコーヒーに入れる。その上さらに、ミルクまで追加している。それを見ていたロアがあからさまに嫌な顔をした。

「げーっ。アムリタってもしかしてすごい甘党？」

ロアが訊ねる。

「別に……魔法を唱えると脳が疲れるから。脳の疲れを取るには糖分が効果的で……」

アムリタが蘊蓄を全部言い終える前に、ロアはまたも爆笑した。

「だはははは！ まるで健康ヲタクのばばあだな」

アムリタは黙ってコーヒーを啜った。

「太りますよ」

メルフィナがずばりそう言う側から、アムリタはバスケットに入ったチョコレートに手を伸ばした。それを口に放り込むと、コーヒーをもう一口啜る。ロアの笑いが加速する。

「……太った方が単純な魔力は上がると言われてるわ。眉唾かもしれないけど、それは太ってみなければ分からない」

アムリタはもぐもぐとチョコレートを頬張りながら言う。

「でも、どうしてか太らないの」

アムリタの言葉に、メルフィナは一瞬頬を引きつらせる。

「そういやメルフィナはブラックなんだな。甘い嫌い？」

自分で紅茶を淹れてきたネツコが何気なくメルフィナに訊ねる。

「……ええ、まあ……」

メルフィナの心持ち暗い返事を不思議に思うネツコ。それが鈍感な質問であつたと気づくには、やはりネツコ、ロア、アムリタの三人は、鈍感すぎた。

——第一ミルチア城、アルテオムの私室。

「……馬鹿な！」

兵士からの報告を受けたアルテオムの顔が豹変する。

「吸血鬼と化したブルーナイツが、他のエーデルリッターと交戦中だ？」

「は、はい。ブラックナイツ、ホワイトナイツに加え、ルビーナイツ、エメラルドナイツも

続々とここ第一ミルチア城周辺に集結している模様です！　しかし、どうしてブルーナイツが吸血鬼化したかは、いまのところ不明で……」

アルテオムは眉を寄せ、宙を睨みつけた。その残酷な目つきに、彼の前に跪く兵士の背筋が

ゾクリとする。

「……さがれ」

アルテオムが一言そう呟くと、兵士は慌ててその場を離れた。

「は、はい。失礼致します！」

アルテオムはたった一人、自分の部屋で立ち尽くしている。

（まずいな、交戦が早すぎる……もしブルーナイツが我が配下と分かれば……私とボールスの関係がばれるのも時間の問題だ。いまはエーデルリッターだけが、私が使徒と関わりあっていたとあれば、他の兵にまで謀反を起こされかねん……いや、それ以前に民衆の反感を買う！ここまできて、みすみす王座を見逃せと言うのか……！）

「……おのれボールスめ、余計なことを……」

アルテオムが呟いた瞬間、まるでカーテンの影そのものが形作ったかのように、そこからゆっくりとボールスがあらわれた。

「ボールス！ 貴様、誰に断ってブルーナイツをエーデルリッターと接触させた？」

ボールスはカーテンを空けると窓際に腰を落とし、外の様子を窺った。二千、三千もの兵が、いまは吸血鬼となった同士を相手に激しい戦いを繰り広げている。それを見下ろすボールスの目は、静かながら、しかしどこか人ならぬ深みと凄みを帯びていた。

「答えろ、ボールス！」

アルテオムが言葉を荒げるが、ボールスは全く表情を変えない。

「……なに、退屈しのぎに思ってるね」

ボールスは窓の外に目をやったまま答えた。

「退屈しのぎだと？」

アルテオムはテーブルに置いてあったブランデーを掴んでグラスに注ぎ、一気に飲み干した。熱い息を吐くと、もう一度ボールスを睨みつける。

「大したものだな。貴様の退屈しのぎのお陰で、私の計画に大変な亀裂が入ってしまった。分かっているのか？もしも貴様との関係が民衆や兵たちにばれれば……」

「ばれればどうなる？」

「……なに？」

「連中が貴様に反旗を翻す、とでも？」

「……魔物の脳ではそうならないと思えるのか？」

アルテオムの皮肉に、ボールスは眉一つ動かさなかった。

「……内乱はエーデルリッターに留まるよ。いや、むしろその逆だ。私の見立てでは、貴様の権威はより強固なものとなるだろう」

「なんだと？」

ボールスの不可解な言葉に、アルテオムが聞き返す。ボールスはふわりと窓際から降り、酷く怠慢な動きで部屋を歩き始めた。そして壁にかかった絵画の前にまで来ると、立ち止まって

それを鑑賞する。その動作が、アルテオムの神経を逆撫でした。

「……どういふことか説明しろ、ボールス！」

憎々しげにボールスの背中を睨みつけながら、アルテオムは怒鳴った。

「……アルテオム、お前はなぜあのようなガラクタの研究を進める？」

「何の話だ……！？」

「蟲だよ。なぜあのようなものに拘るのだ？」

「……」

ボールスがゆっくりと振り返る。アルテオムは訝しげな表情を彼に向け、質問の意図を考えた。

ボールスはアルテオムの返事を待たずに、言葉続ける。

「……私が吸血鬼というものに求めたのは、力だ。魔物や使徒、いや、勇者や魔王をも超える地上最強の力をこの手に望み、ただそれだけのために研究を進めてきた。そして行き着いたのが吸血鬼だった」

「……」

「貴様はなにを望み、なにを求め、なにを欲して蟲どもを作り上げた？なぜ私と手を組んだ？なぜ貴様は危険を冒してまで、ミルチア王の位を望み、奪い取ったのだ？他ならぬ、力を欲したからではないのか？」

「……」

「……ならば、民衆が望むものはなんだ？魔物や他国が自分たちの生活を脅かそうとする昨今、連中が心から望むものはなんだと思う？」

「……」

「分かるかね？新しき王よ」

ポールスが淡々と語りつづける。彼の意図を察し始めたアルテオムは、その口元に徐々に引きつった笑いを湛えていった。

「力、だな」

アルテオムが呟いた。ポールスは高慢な笑みを浮かべると、アルテオムの手にもったブランデーを受け取り、ビンのままゴクゴクと飲んであっという間にそれを空にした。

「ご名答……望むものは、皆同じだ」

しかし、アルテオムは急に難しい顔をして、荒々しく自分の椅子に腰かけた。

「……いや、民衆の望むものはお前の言う『力』とは少し違う。彼らが求めているのは安全だ。自分の国の兵に得体の知れない吸血鬼などがいるのは、それは安全じゃあない」

「安全とは、恐怖の解消に他ならん。恐怖を解消することができるのは、やはり力だけだ。魔王という更なる脅威が自分たちに迫っている今、吸血鬼が自分たちの力になると分かれば、彼らはそれを否定などせんよ。もっとも、それを上手く民衆に知らしめるのは貴様の仕事だな」

「……」

「恐怖を上手く扱うこと、それが支配の基本だよ」

アルテオムは窓の方へ視線をやると、長い溜息をついた。

（……そう、恐怖にとらわれた者ほど、扱いやすいものは無い。解決策を提示すれば、それがいかに頼りないものであるかと必死にすぎり付いてくる……分かるかね？王位などという下らん権力を失う、恐怖にとらわれた、哀れなアルテオム王よ）

ボールスは牙を覗かせ、笑みをこぼした。背を見せているアルテオムはその笑みに気づかない。アルテオムがゆっくりと振り返る。

「……仕方あるまい、今回はお前の賭けに乗ろう。と言っても、もはや乗らざるを得ない賭けだが」

「ふふ」

「だがもし、次に私になんの相談も無くこういうことをしてみろ。その時は……」

アルテオムは、残酷性に醜く歪んだ表情でボールスを睨んだ。

「おお、怖い。そうそう、それが支配だ。分かるな？アルテオム。恐怖だよ！もっとも、私は支配されるのはあまり好きでは無いのだがね」

「誰のお陰でエレインが手に入ったと思っている？」

「ああ、わかっているさアルテオム王。感謝しているよ。ではごきげんよう」

そう言うボールスはマントを翻し、アルテオムの部屋から出て行った。

「……ボールスめ、気に入らん。今に見ておれ……」

ボールスの出て行ったドアをじっと見つめるアルテオム。

（しかし、どうしたものか……状況が不味いことに変わりはない。なんとかエーデルリッターどもを謀反人として仕立て上げなければ……）

外ではすでにエーデルリッターのほぼ全軍が集結し、無益な殺し合いに一層拍車をかけていた。その様子に第一ミルチア城内は混乱し、警備も手薄となる。コーデリアの読みのとおりだった。

（そろそろ良い頃合ね……）

コーデリアは襲い掛かってくる吸血鬼の一人を切り倒し、大声で叫んだ。

「副隊長、しばらくここを預ける！ 頼んだぞ！」

そう言い残すと、コーデリアはロア、ネッコ、メルフィナ、アムリタの待つブラックナイツの屯所へと走っていった。

コーディネリア達は第一ミルチア城の城門に近づいた。駐在の兵士がコーディネリアの顔を見て敬礼する。コーディネリアも会釈をする。

「ごくろう」

「はっ」

「何かあったのか？ずいぶん騒がしいようだが」

コーディネリアが兵士に尋ねる。城門では数多くの兵士が走り回っていた。

「どうやら城内に賊が進入したようで。コーディネリア殿も御気を付けてください」

「うむ」

「あの、コーディネリア殿。その後ろにいる者たちは？」

兵士が黒いフードで顔を隠したネツコ達を見る。

「心配ない。私の知り合いだ」

「しかし、ご存知でしょうが城内に入る者は一応名前と顔を確認しなければならぬ決まりになっています。特に最近アルテオム様からきつく言われておりまして。失礼ですがそちらの方々、フードを取っていただきますか」

「む……」

コーデリアが言葉に詰まる。其処に別の兵士が走ってきた。

「駄目だ！ 賊は全然捕まらん。賊は恐ろしい手馴れだ。兵の数が足りないんだ。お前も来てくれ」

走ってきた兵士が城門警備していた兵士に言う。ちょうどいい所に来たと云わんばかりにコーデリアが口を出す。

「だからと言って城門の警備をゼロにするわけにはいかんだろう。お前達は城門を固める。賊は私が捕まえる。これは命令だ。みんな行くぞ」

コーデリアは早口でそう言って走り出す。

「あ、あの。コーデリア殿……」

呼び止める兵士達を無視してコーデリアの後を走っていくネツコ達。

「ちょっと強引過ぎたんじゃないか……」

ネツコが黒いフードの下からコーデリアに言う。

「仕方ないでしょう。こうでもしないと城内に入れなかったんだから」

「秘密の抜け道とかは無かったのかよ。ほらよく物語とかにはあるじゃないか」

「この第一ミルチア城にそんなものはありません。仮にあったとしても知っているのは王族だけで私は知りません」

走りながらロアの問いに答えるコーデリア。

「それと城内でもフードは取らないでください。異国の者だというだけで捕まってしまうから」

「エレイン様が捕まっているのは何処です？」

「一番確率が高いのは最下部の地下牢でしょうね。其処まで案内しますから黙ってついてきてください」

「賊ってのはやっぱりライオネルさんでしょうね」

メルフィナが言う。

「一人で潜入するなんて無茶苦茶だな」

ネツコが呟く。

「おっと、俺はここまでだ。悪いけどちょっと用があるでね。エレイン姫の救出はお前らに任せるぜ」

ロアがそう言ってコーデリア達から離れて横の道に逸れた。

「ちよっと！ 何処に行くんです？」

メルフィナが叫ぶ。

「心配するな。何とか後で合流する」

そう言って走り去るロア。

「あの吸血鬼の人も無茶苦茶ですね。心配するなって言っても、城内の兵士に呼び止められた

ら一人でどう対応する気でしよう」

コーデリアが呟いた。

「おい、其処の怪しいフードの者。止まれ」

案の定、数名の兵士に呼び止められるロア。

「おっと、見つかったか。やっとこのうっとおしいフード脱げるぜ」

そう言うときロアはフードを脱ぎ捨て、立ち止まることなく兵士達を風ぎ飛ばしていった。

「いたぞ！ 賊の仲間だ。捕まえろ！」

風ぎ飛ばされた兵士が叫ぶ。ロアの前にワラワラと兵士達が集まってきた。

「はっーは！ 何人でもかかって来い」

ロアは兵士達に突撃して行った。

「なんだか上のほうが騒がしくなってきましたね」

エレインが天井を見上げて言った。

「何かあったようですね。地下牢の見張りの兵士も一人か。今なら……」

エレインとは隣の房のロットが呟く。そして叫んだ。

「おい、大変だ！ すぐに来てくれ！」

「なんだ、どうした？」

見張りの兵士が急いでロットの牢に近づいて来る。

「そこだ。その壁のところを見てくれ」

「うーん？」

ロットが牢の奥の壁を指差す。兵士が壁をよく見ようと鉄格子に顔を近づける。そこにガウエインの強烈な拳が飛んできた。殴られてぐったりと倒れる兵士。その腰から鍵の束を奪った。

「うまくいきましたね」

ガウエインが鍵で地下牢を開けて言う。

「うむ。エレイン様、今なら脱出できそうです。我々と一緒に来てください。危険は承知ですが、エレイン様の安全は我々が命を駆けて守ります」

ロットが言う。

「ちよつと！ そんな馬鹿王女なんて助ける必要な……」

牢から出たリュネットが抗議の声を上げようとしたが、その口をガウエインが抑えた。

「わかりました」

エレインがゆつくりと牢から出る。

「しかし、この城から逃げるわけにはいけません」

エレインが毅然とした声で言う。

「なぜです？」

「聖劍エクスカリバーを取り返さなければいけません。あれこそ我が国の宝にして勇者の証。その力はいかなる邪悪も打ち払う聖劍です。魔族の手に渡していい物ではありません」

「危険すぎます」

「あなたが何と言おうと私はあの剣を置いたままこの城を出るつもりはありません」

「……わかりました。我々も一緒に探します」

エレインの固い決意にロットも頷く。

「何がわかりましたよ。私はわかってないわよ！　こんな馬鹿王女と一緒に行動なんかできないわ。私は勝手にさせてもらうわよ」

ガウエインの手を振り払って一人で歩き出すリユネット。

「リユネット殿！」

ロットは呼び止めるが、リユネットはそのまま立ち去ってしまった。

リユネットが城の廊下に出ると、そこら中で兵士が走り回っていた。一人の兵士がリユネットに目を留め走ってくる。

「おい！　その女……」

「うるさいっ！」

リユネットが放った魔法で吹き飛ばされる兵士。兵士だけではなく廊下の壁の一部も一緒に吹き飛んだ。その音で辺りの兵士達が一斉にリユネットを見つけた。

「あーむしゃくしゃするわ」

リユネットはそんな兵士達の視線など気にしていないように廊下の中央を歩いていく。そのあまりの堂々とした様子に誰も呼び止められないでいるようだった。もしくは彼女の魔法が怖いのもかもしれない。

そのリユネットの遙か前方に兵士の一団が見えた。十数人のその兵士を軽々飛び越えていく男が見える。ロアだった。そのまま、ロアは走り去って、リユネットの視界から消える。

「いたー！ 見つけましたよ、ロア。もう逃がしません」

リユネットが前の兵士の一団に魔法を放つ。兵士は蜘蛛の子を散らすように逃げ去った。そのままリユネットはロアを追って走り出した。

ロアは城の最上部、屋上に出た。強い風が吹いている。太陽は沈んで、すでに空は暗かった。星は輝いて、その中に一段と輝く丸い月があった。気味が悪いほど赤い月。

一人の男が立っていた。ロアはポケットからタバコを取り出すと火をつけ、ゆっくりとその男に向かって歩きだした。その男、ボールスはそのロアを見て唇を吊り上げた。

「ふふふ、よく来たな。どうやって私がこの国のこの城にいるとわかった？」

「なーに、たまたまこの国に來ちまっただけさ。お前がここにいると感じたのは偶然だよ」

ロアが煙を吐き出しながら言う。

「俺の事なんかより、お前こそなんでこんなところにいるんだ？あのアルテオムって奴を操って

何を企んでいる？」

「なに、この国にいるのはちょっとした研究のためだ。いいサンプルが手に入ってね」

「ふーん。まあ、お前が何企んでようと俺には関係ないけどな」

ロアは本当に興味ないように言った。煙草の煙で輪を作っている。

「ふふふ、まあ久しぶりに会ったんだ。ゆっくりしていればいい」

「ああ、そうするさ。なにせ今日で二度とお前と合うことはなくなるんだからな」

ロアがタバコを投げ捨てて言う。目つきが変わった。月の光を受けて金色の瞳が輝く。

「ふふふっ、いい殺気だ。私に傷一つでも付ける事ができたらお前の記憶は戻してやるぞ」

ボールスが笑って言った。彼の黒いマントが風を受けはためいた。月の光を背後から受け、ボールスの影が巨大に石畳に映っている。

ロアが地を蹴った。七、八メートルあったボールスとの間合いが瞬く間に詰まる。ロアが右手を振り上げボールスの肩めがけて振り下ろした。ボールスが後ろに引いてロアの攻撃をかわす。ボールスの漆黒のマントがまるで生き物の様に動いた。マントがロアに襲い掛かる。ロアは地を蹴って間合いをはずした。

「おもしろいだろう。私の錬金術の作品だ。人間の皮をつないで血で染め上げて作ったマントよ。鉄よりも固く、蜘蛛の糸より柔軟だ。そして切れ味もご覧のとおりだ」

ロアが視線を下げる。ジャケットの裾がスッパリと切られていた。

「お前ごとき相手にするのにわざわざ自分の両手を使うまでもない。このマントがお前のいい

相手だろう」

ボールスが両の腕を組んで笑う。

「くだらねえ物使つてないで本気出せよ」

「くだらない物だと。だったらこれが避けられるか？」

ボールスのマントが伸び、地面に広がっていく。やがて影とマントの区別が無くなっていった。

ロアが飛ぶ。一瞬の差で先ほどまでロアがいた地面から刃のマントが現れ、空を切り裂いた。「よくかわしたな。だがまだまだいくぞ」

ロアが着地するであろう地点からまたマントが現れる。ロアは空中で体を一回転させ着地する場所を変えた。ロアは着地するとそのまま走り出す。次々とマントがあらわれ、ロアに襲い掛かる。ロアはすばやい動きでそれをかわしていく。

「もう一度言うぜ。さっさと本気だしな」

ロアがマントを紙一重でかわしながら言う。

「ふん、あいかわらず口だけは達者な男だ」

ボールスが鼻で笑う。その時、ロアの周りを囲むように数個のマントの刃が現れた。一斉にロアに襲い掛かる。

「ぬ……」

ボールスが唸る。マントの刃がロアに触れようかという時、ロアの姿がボールスの視界から

消えたのだ。ボールスが後ろを振り返る。そこにはロアの姿。ロアの右ストレートがボールスの顎を捉える。ボールスはそのまま数メートル後方に殴り飛ばされ、大の字に地面に倒れた。「さて、傷は付けたぜ。約束通り記憶は返してもらう。だが心配するな。記憶はお前を殺してからゆっくり返してもらうからな」

ロアが倒れたままのボールスに向かって言う。ボールスの口から笑い声が聞こえた。

「ふははははっ、さすがは私の作った作品だ。だが……」

ボールスがゆっくりと起き上がる。

「少々傲慢すぎたな。教えてやろう。十三使徒の一人、吸血鬼の祖の力というものをな」

ボールスの瞳が燃えるの様な金色に輝いた。

リUNETTが屋上に続く階段を駆け上がる。屋上にでる扉は開け放たれ、そこから身を切るような冷たい風が吹き込んでくる。風と共に何か嫌な匂いもする。なんだろう、この匂い。

リUNETTは屋上に出た。瞳に飛び込んでくるのは赤い色。嫌な色。嫌な記憶が思い出される。リUNETT自身も忘れていた幼い頃の記憶。頭が割れるように痛い。幼い私は自分の部屋にいた。悲鳴が聞こえる。窓から見る町は赤く燃えている。怖くなった私は、両親のいる部屋に走ってく。ゆっくり扉を開ける。そこで見たものは……。

リUNETTはわれに返った。屋上には黒いマントの男。男の周りには真っ赤な血が飛び散っ

ていた。その血の中に倒れている一人の男。

「ロア！」

リュネットは叫んで倒れているロアに走りよっていく。ボールスがリュネットの方を振り向いた。

「ん？小娘、何の用だ？」

男がリュネットのほうを振り向く。明らかに人間の持つ気配ではないとリュネットは感じ取った。

「ロアは私の獲物だ。他の誰にも殺させん。消えうせろ、邪悪な魔物め！」

リュネットはそう言うと言魔法をボールスに放った。白い閃光がボールスを包む。白い光が弾け、視界が眩むような爆発が起こる。

リュネットはロアを抱き起こした。ロアはぐったりとして動かない。

「おい！　しっかりしろ、ロア！　死ぬんじゃない！　いま回復魔法を……」

「やめておけ。吸血鬼に回復魔法などかけたらよけいに死を早めるだけだ。もっともほっておいてもそのうち死ぬがな」

ボールスが煙の中からゆっくりと姿を現す。

「馬鹿な……直撃したはずだぞ」

リュネットがロアから手を離し、銀の剣を構える。

「人間にしては中々の魔力だ。だが相手が悪かったな、小娘。その程度の魔法では十三使徒相

手にはたいしたダメージも与えられんよ」

ボールスが笑って言う。

「十三使徒だと……ふん、くだらん冗談だ」

リユネットが両手で銀の剣を正眼に構えたまま、鼻で笑う。その目が驚きで大きく見開かれる。いつの間に移動したのか、ボールスが片手でリユネットの剣を掴んでいた。

「残念ながら冗談ではない」

ボールスの手の中で銀の剣が粉々に碎かれる。リユネットは急いで剣の柄を離し、後ろに飛び退いた。その背中に何かぶつかる。いつのまにかボールスはリユネットの後ろに回りこんでいた。

「運動して少々腹が減ったところだ。頂くとしよう」

ボールスが口をリユネットの首筋に近づける。赤い口から覗く尖った牙が白い肌に突き刺さった。

「あっ……」

リユネットは微かに声を上げ、体をビクンと震わせる。やがてボールスが離すとリユネットはゆっくりと地に崩れ落ちた。

口から血を滴らせながら、ボールスは城の屋上の城下を見渡せる場所まで歩いていった。城下では人々が慌しく動いている。まるで蟻のようだ。

「ふははははっ。虫ケラども、支配してやるぞ。新しくこの世界の覇王になるのはモードレッツ

ドでもトウオンでも、魔王モートでもない。この私だ」

ボールスは笑った。彼の笑い声に呼応するように空の闇はどんどん深く、月は赤く禍々しく光っていく。

どこからかボールスの元に一匹の蝙蝠が飛び寄ってきた。ボールスの周りをひらひらと飛び回る。

「……ふん、エレインが逃げたか。ラウドとアルテオムは何をやっている。まあいい、この城からはまだ出ていないだろう。すぐに連れ戻してやる」

ラウドは城の屋上から立ち去った。

薄れいく意識の中でリユネットが見たもの、それはかつて彼女の両親を殺して男の姿。泣きながら行くあてのなかった私を助けてくれた人。

リユネットはゆっくりと目を開けた。視界がぼやける。全身から力の抜けていくのがわかる。だがここで眠るわけにはいかない。リユネットは全身の力を振り絞って立ち上がった。立ち上がった瞬間、よろけて膝をつく。ふらつきながらもロアの元に近づいて行く。ロアのもとまで来て、リユネットは倒れた。

リユネットの手がロアの顔に触れる。氷のように冷たい。血が流れすぎたようだ。吸血鬼の異常な回復力も血がなくなってしまうえば働かない。ロアの胸に輝く、イーリアスの紋章をかたどったネックレス。かつて幼いリユネットがロアにあげた物。

「……まだ、こんなもの持ってたとはね……」

リユネットがネックレスを見て弱々しい顔で微笑んだ。

「……死ぬな……ロア……」

リユネットは腰から短剣を引き抜き、自分の首に当てた。

ロアが目を開ける。首から血を流し側に崩れ落ちているリユネット。口の中に広がる誰かの血の味。自分の体をぬらす暖かい血。ロアが立ち上がる。ゆっくりとリユネットを抱きかかえた。もう、すでに心臓は止まってしまっていた。

ロアが満月に向かって咆えた。

「しかし、エレイン様、どうするのです？ 闇雲に探しても見つかるわけはありませんよ」

エレインの前を走りながらロットが言った。立ちはだかる兵士達を片っ端から切り捨てていく。

「わかりません。地下から順に部屋すべて探していくしかないでしょう」

エレインが言う。

「エレイン様」

エレインを呼ぶ声が聞こえる。エレインが振り向くとそこにはネッコ達がいた。

「ネッコ、メルフィナ、それにアムリタも。貴方達どうしてここに……」

「助けに来たんだ」

ネッコが言う。

「ライオネル、それにロアは？」

「わかりません……この城の中にいるのは確かですが……」

メルフィナが答える。そのメルフィナの横からコーデリアがエレインの前に進み出た。

「お初にお目にかかります、エレイン様。私はミルチア国エーデルリッター、ブラックナイツの将、コーデリアと申します。この度は我が国がとんだご迷惑を。しかし、その首謀者はこの私が責任を持って成敗します」

エレインに一礼するコーデリア。

「ネッコ殿、メルフィナ殿。貴方達はエレイン姫と共にすぐにこの城を脱出してくれ。後は我々ミルチア国の問題。君達に迷惑はかけたくない」

「そういうわけにはいきません。十三使徒が関わっている以上、これはミルチア一国の問題ではありません。それに私はまだこの城から脱出するわけには行かないのです。何とか聖剣を探し出さなければ」

エレインが言う。

「英雄騎士ロット。どうしてお前がここに？」

ネッコが聞く。

「久しぶりだな、ネッコ殿。我々はアルテオムという者の罠に掛かり、クラモリ王暗殺の犯人

にされてしまった」

ロットが苦悩に満ちた顔で呟く。

「……やはりそうか。許せん、アルテオム。私は今からアルテオムと会ってくる」

コーデリアが剣の柄に手を当てて言った。アルテオムに会ったら即切り捨ててしまいそんな顔つきだ。

「アルテオムという者が何を企んでいるかは知りませんが、なんであれ貴女一人で行くのは危険すぎます。ロット殿、貴方達はコーデリア殿に力を貸してあげてください」

「エレイン様は？」

ロットが聞く。

「私はネッコ達と聖剣を探します。それにライオネルの事も心配ですし。力を貸してくれますね？みんな」

エレインがネッコ達に聞く。ネッコとメルフィナは頷き合った。アムリタは迷惑そうな顔をしていたが、エレインに見つめられてやがて頷いた。

「わかりました。エレイン様、どうかご無事で」

ロットはエレインに一礼すると、ガウエインとルーシィを連れてコーデリアと共に走り出した。

アルテオムは執務室で静かに座っていた。城内はまだ騒がしいようだが所詮多勢に無勢、い

ずれ賊は捕まるだろう。ブルーナイツとその他のエーデルリッターの戦闘も考えようによっては幸運だ。これで邪魔なエーデルリッター同士が殺し合いをしてくれるのだから。騎士団などなくとも私には装甲蟲がいる。あれさえ生産し続ければ他国の軍隊など物の数ではない。

突然アルテオムの思考が遮られた。ドアの外で音がしたのだ。

「誰だ？ 誰も入れるなどといったはずだ」

ドアがゆっくりと開く。立っているのは一人の男。その足下には警備をしていた兵士の死体が転がっている。

「……ライオネル。まさか貴様、ライオネルか？」

アルテオムが男を見て驚いたように椅子から立ち上がる。

「久しぶりだな、アルテオム。このような形で再び会うとは思っていなかったが」

「……なぜ貴様がこんな所にいる？」

「……エレイン様は何処にいる？」

ライオネルは静かにそう言っただけで腰から剣を抜いた。

「ふはは、そうか。今はエレイン姫の護衛役をやっているのだったな。賊というのは貴様のことだったか。どうりで捕まらんわけだ」

アルテオムも腰から剣を抜く。アルテオムが優雅に剣を構えた。

「……」

「……」

お互い剣を構え、ゆっくりと詰め寄る。ライオネルが剣を振り下ろす。アルテオムはその攻撃を剣ではじき、素早くに反撃の剣を繰り出した。剣と剣がぶつかる金属音が執務室に響く。互いに体を絶え間なく移動させ、流れるように剣戟を繰り出す。二人の戦いはまるで剣舞でも踊っているかのように鮮やかなものだった。

アルテオムとライオネルが間合いをとる。両者の体には既に数箇所軽い切り傷があった。傷から血が滴り落ちる。

「……腕を上げたな」

「そういう貴様は相変わらず人間離れた強さだな。受けるだけで精一杯だ」

笑ってそう言うアルテオムは指を鳴らした。執務室の壁の一部が開き、中から機械音を立てて三体の装甲蟲が出てくる。体長は4m以上あるだろうか。銀色の厚い装甲に覆われて、太い六本の足を持っている。

「貴様とまじめに戦うほど私は馬鹿ではない。これは最近完成したばかりの試作品だ。テストにはちょうどいいだろう」

装甲蟲が六本足でライオネルのほうにゆっくりと歩いていく。ライオネルが装甲蟲に剣を向けた。

「無駄だ。いくら貴様でも一人で装甲蟲三体には勝てん。諦めろ」

アルテオムが剣を腰の鞘に戻して笑った。

「なんでしょう……この部屋」

メルフィナが呟いた。目の前には他の部屋と違う大きな黒い鉄の門がある。ここは城の地下一階。上の階は騒がしいが、今幸いこの辺りに敵の兵の姿はなかった。

「確かに明らかに他の部屋と違うな。入ってみるか」

ネツコが門の取っ手に手をかけようとする。その手をアムリタの手が掴んだ。

「……まって。この扉、魔法の罫がはってあるわ」

「……罫？」

ネツコが驚いたように言う。

「そう。何も知らずに取っ手を掴んだら魔法が発動するわ。どんな種類の魔法かまではわからないけど……少なくとも命はないわ」

アムリタの言葉を聞いてネツコが急いで手を引っ込めた。

「すごいわ。さすがアムリタ。魔法使いって頼りになるのね」

エレインがうれしそうに声を上げる。ネツコは不満そうだ。

「……そう？　こんなの魔法使いの初歩よ」

ネツコがさらに落ち込む。

「で、その魔法の罫を解くことはできるの？」

「……見た事もない魔力の織り込み方だけど……基本は同じのはず。少し時間は掛かるけど、何とかなると思うわ」

そう言つてアムリタは扉に手をかざし、呪文を呟き始めた。

「危なかつたですね、ネツコ」

呪文を唱えているアムリタの横でメルフィナがネツコに言った。

「うるさい、僕だつて言われたらすぐに気付いたさ。ちよつと油断してただけだよ。そういうメルフィナだつて気付かなかつたじゃないか」

「私、黒魔術一般は専門外ですのぞ」

メルフィナが笑つていった。

「しかし、わざわざ罫を仕掛けるなんて、よっぽど大切な部屋なんでしょうね」

やがてアムリタが呪文を唱え終え、目の前の黒い扉が一瞬光を放った。

「……解けたわ。誰が掛けた魔法か知らないけど、現代じゃ考えられないような複雑な複雑な魔法印……勉強になるわ……」

そう言つてアムリタが扉の取っ手に手を掛けた。黒く重い扉が音を立てて開いていく。

エレイン達が部屋の中に入る。部屋は広く薄暗かつた。いたるところに物が散在し、かなり散らかつてゐるようだ。所々に直径二メートルはあるかというガラスの柱が立っている。そのガラスの柱の中に入っているのは見た事もないような奇形の生き物達。目が六つもある魚もいれば、頭が二つある猿もいる。それどころか何と形容すればいいかもわからないような異形の生物もいた。

「……何これ……」

エレインが絶句する。

「……魔法科学……一般的には錬金術って呼ばれている研究ね。錬金術の中でもかなり偏った研究をしていたみたいだけど」

「……こんなもの神への冒瀆です」

メルフィナが唸った。

「……そう？」

アムリタは平然と部屋の奥に進んでいく。ネツコ達もそれに続く。エレインはガラスの柱から十分に距離をとって進んでいった。

「……すごい。この部屋にあるものだけでも、今の人間の魔法科学の研究は数段先に進むわ」
アムリタは辺りを見回しながら呟いた。

「あった！」

エレインがそう言って部屋の片隅に走りよった。そこにはエクスカリバーが無造作に置かれてあった。

「これでこの城には用はないわ。早くコーディア殿達と合流して脱出しましょう」
エクスカリバーを掴んでエレインが言う。一刻も早くこの部屋から出たそうだ。

「あら、これ何かしら？」

メルフィナが棚に並んであった沢山のファイルの中から、一冊だけ倒れて表紙の見えるファイルを手にとった。その表紙には『E-01039』と黒い文字で、その下に小さく『ロ

『アールソア』と赤い文字で書かれてあった。メルフィナがファイルを開いて見てみる。中には見慣れない文字と数式がぎっしりと書き込まれていた。

「なんなんだそれ？」

ネツコがメルフィナの横からファイルを覗き込む。

「……アムリタさん、これ何を書いてあるかわかりますか？」

メルフィナがファイルをアムリタに見せた。

「……これは古代文字？」

アムリタが眉をしかめて呟く。

「ええ、古代文字に見えます。しかし、厳密には古代文字の文法ではないようです。普通の古代文字なら神学者の私には読めますから。これは私にもほとんど読めません」

「……見る限り何かの研究の過程のメモのよう……」

「ええ……でもどうしてこんな所にロアの名前が……」

メルフィナが深刻な顔をしてファイルを見つめる。

「そんな事どうでもいいから早くここを出しましょう。いつ敵が来るかわからないですよ」

エレインがメルフィナを急かした。

「……そうですね」

メルフィナは手にファイルを持ったまま入り口に急いだ。

「ちよっと待った」

部屋の入り口でネッコが立ち止まった。部屋の中のほうを振り向いて魔法の詠唱に入る。ネッコの持つ杖から赤い炎の玉が放たれる。火炎球は部屋の奥の壁に当たり炎を撒き散らして弾けた。部屋の至る所から赤い炎があがる。

「これでいい。どうせろくな研究してたんじゃないだろうし」

ネッコが言う。

「コーデリア殿達は城の最上階のアルテオムの部屋に向かいました。私達も早く行きましよう」

エレインはそう言っ先を走り始めた。

エレイン達は城の兵士達の妨害もあったがなんとか一階の中央ホールまでやって来た。天井に豪勢なシャンデリアが幾つも釣り下がっている。普段ならここで舞踏会でもやるのだろう。だが今日は違った。

先頭のエレインが息を呑んで立ち止まる。部屋中深紅に染まっている。酷い惨劇だった。広い中央ホールの至る所に兵士の死体が転がっている。それも剣で切られたような綺麗な死体ではない。体をバラバラにされ、苦悶の表情を浮かべたままの死体だった。体の部品が飛び散ってしまっているので幾ら死体があるか数えることもできない。

「来たか……」

ホールの中央、死体の山の中に立っていた男がエレインに向かって言った。

「……ボールス」

エレインが震える体でなんとか声を搾り出す。ボールスの名を聞いてネッコ、メルフィナ、アムリタは身構えた。

「やってくれたな。私の研究所を破壊してしまうとは……まさか、あの魔法印を解除できる人間が現代にいるとは思わなかった……おかげで年甲斐もなくイライラしてしまったよ」

ボールスが苦笑して周りの兵士の死体を見る。

「気分を害したというだけで無意味にこれだけの人を殺したのですか！」

エレインが精一杯に叫ぶ。

「人間が百や二百死んだからと言ってどうしたというのだ。君達が破壊した私の研究物はそんなものとは比べ物にならないほど価値があったのだよ」

「人の命をそんなものですって！」

エレインが腰から聖剣エクスカリバーを引き抜いた。

「君達にその償いはしてもらおう。エレイン以外は楽には殺さん。永遠に生かし続けて苦痛を与えてやる」

ボールスが言った。

ネッコとアムリタが魔法を放った。呪文の詠唱の時間は十分にあった。どちらもかなり高位の攻撃魔法だ。赤い閃光がボールスに向って放たれる。ボールスは片手を前に上げた。ボールスの前に赤黒い魔法壁が現れる。ネッコとアムリタの放った魔法はあっさりとその魔法壁に塞

がれた。

「なっ……」

「……」

驚愕の声を上げるネツコ。アムリタも眉をしかめている。

「貧弱な人間にしてはまあまあ魔力だ。だが……」

ボールスの目が金色に光る。漆黒のマントがひとりでに浮き上がり、大地が震え低く唸りだした。魔法使いでないエレインにも感じとれるような凶悪な魔力を感じる。

「……覚えておくがいい。これが本当の力というやつだ！」

ボールスの手から赤い光が放たれる。

「『白銀の手』！」

とっさにメルフィナが防壁呪文を唱える。メルフィナ達の前に銀色に燦爛と輝く魔法壁が現れた。ボールスから放たれた赤い光が白い魔法壁にぶつかる。銀の魔法壁が大きく揺らいだ。

「……まずいです……抑え切れません……」

メルフィナが苦悩の表情を浮かべる。すぐにアムリタとネツコも防壁呪文の詠唱に入る。

銀の魔法障壁にさらに二つの魔法壁が加わった。

「無駄だ。人間ごときでは何人集まろうと防ぎきれん」

ボールスが魔法を放ちながら笑う。事実、三人の魔力を合わせた魔法壁もすでに揺らぎつつある。

「……三人がかりでも防ぎきれないのか……このままじゃ、すぐに魔力が尽きる……」

ネッコが両手を前に突き出して苦しそうに言う。

「……私がボールスに斬り込みます。そうすればボールスも魔法を唱え続けることはできないはず」

エレインが決然とした表情で言った。

「……無茶だわ」

アムリタが言う。

「そうです。確かにボールスの魔法は途切れるかもしれませんが、かわりにエレイン様が殺されます」

「どの道、このままでは四人ともやられるのです。一か八か賭けてみるしかありません」

エレインがエクスカリバーを手に取り出そうとした。その時、エレインの目にボールスの後方の天井が映った。一人の男が天井に張り付いている。

「ロア！」

エレインが驚きの声を上げる。

「ボールスウウウ！」

ロアが大声で叫んだ。

ロアが天井を蹴る。ボールスが魔法を解いて後方を振り返った。ボールスに飛び掛ったロアの手がボールスの顔を鷲掴みにして床に叩きつけた。床の大理石にひびが入る。吸血鬼特有

の怪力でロアの手がボールスの頭蓋骨を締め付ける。ボールスの額の骨が音を立てて軋んだ。

「この虫ケラがああ！」

叫んで、ボールスの顔を掴んでいるロアの腕をボールスの手が掴む。ロアの手首の骨が音を立てて砕けた。ロアが苦痛の声を上げる。ボールスはそのままロアを引き離し、逆に床に叩きつける。

「消え失せろ！」

倒れたロアの顔めがけてボールスが腕を振り下ろす。人の頭蓋骨などスイカのように砕いてしまふ威力の一撃だった。

「『炎竜の牙』」

突如、アムリタが魔法を放つ。赤い刃が振り下ろそうとしていたボールスの片腕を肩口から切り飛ばした。

「があああああつつああ」

片腕を失って叫ぶボールス。とどめを刺そうとアムリタがもう一度呪文の詠唱に入る。激痛に叫びながらもボールスがアムリタを睨む。

「きやあつ！」

アムリタが衝撃波の様なものを受けて後方に吹き飛ぶ。そのまま壁に叩きつけられた。額から血を流しながら、ぐったりと倒れ込むアムリタ。ネッコとメルフィナ、エレインが倒れたアムリタに駆け寄る。

ボールスの足元に倒れていたロアが飛び起きた。ボールスがアムリタから目を離し、立ち上がったロアを見た。互いの距離は二メートルもない。金色に光り輝く狂気の瞳を宿した者同士、ロアとボールスが睨みあう。

「がああっ！」

獣の様な声と牙を出し、威嚇のように唸るロアとボールス。ボールスの腕から吹き出す血で両者とも真っ赤に濡れている。

突如、ボールスの片腕が凶器のように繰り出された。ロアは身を捻るがかわしきれない。

ボールスの爪が刃物のような鋭さでロアの胸を切り裂く。ロアは怯みもせずボールスの顔に向って腕を繰り出す。ロアの爪がボールスの左目をえぐりとった。

「ぬううっ」

ボールスが呻く。ロアはその隙を逃さなかった。ロアの伸ばした手はボールスの胸、心臓の位置を貫いていた。

「ぐっ……おおっ！」

ボールスは血の混じった咆哮をあげ、なおも深く突き刺そうとするロアの腕を掴んだ。

「弱い……弱いぞ！」

ゴキッという音がして、残っていたロアのもう片方の手首の骨も砕けた。

「錬金術、いや生命を研究して数百年、優れた肉体を作る事だけを求め、己の体を進化し続けてきた！それが私だ！貴様らなんぞとは種としての優劣自体が違うのだ！」

ボールスがロアの体を片腕で吹き飛ばした。壁にひびが入るほど強く叩きつけられたロアはそのまま倒れて動かなくなる。

ボールスが腕から血を撒き散らし、咆哮をあげながらアムリタ達の元に飛び掛っていく。エレインはアムリタの側で剣を構える。アムリタに回復魔法を掛けていたネッコとメルフィナが攻撃の魔法の詠唱に入る。しかし、間に合わない。信じられないほどボールスの動きは速かった。瞬く間に間合いは詰まる。ボールスがネッコ達に向って腕を振り上げた。

「がはっ……」

ボールスが口から血を吐き、信じられないといった顔で自分の胸を見つめる。其処にはエレインがまっすぐ突き出したエクスカリバーが突き刺さっていた。

「え……」

エレインも呆然とした様子で剣の柄を握っている。

「……ば、馬鹿な……生命を極め……すべての生物の頂点に立つはずのこの私が……私が……」

エクスカリバーが光り輝いた。ボールスの体が四散して辺りに飛び散る。

「私……倒したの？……十三使徒のボールスを……」

エレインが震える声で言った。

「……みたいね」

アムリタが体を起こした。額からの血は止まっている。

「アムリタ！ 動いて大丈夫なんですか？」

エレインがエクスカリバーを放り出してアムリタに駆け寄る。

「ええ、ちょっと頭を打っただけ……まだ少し眩暈はするけど」

アムリタが言った。気のせいか少し微笑んで見える。

「とんでもない化け物でしたね……」

メルフィナが四散したボールスの死体を見て呟く。

「あ、そういえばロアは？」

ネツコがそう言って倒れたロアの方を見る。ロアもふらつきながら立ち上がっていた。

「おお痛て。両腕の骨折れちゃった。まともに動くのが足だけとは情けねえな」

血塗れのロアが笑って言う。震える手で煙草を取り出して火をつけた。

「吸血鬼ってのは回復魔法が使えないから厄介ですね。使えるならすぐに回復魔法掛けますのに」

「これぐらいほっときやすぐに治るよ」

ロアが言う。たぶん吸血鬼だから本当に治るのだろう。ロアがボールスの死体の側まで歩いていった。

「……ようやくくけりがついたな。まあ、記憶の方は後から貰い受けに行くぜ」

ロアがボソツと呟く。

「そういえばロアさん。ボールスの部屋でこんなもの見つけたんですけど」

メルフィナが懷から一冊のファイルを取り出す。手にとって表紙を見たロアの顔が一瞬こわばる。しかし、すぐに普段の顔に戻った。

「ははは、なんだこりや。何書いてあるかさっぱりわからねえや」

ページをペラペラめくりながらロアが笑う。

「そうなんです。私達にも読めません。いつの時代の言語かわかりませんが、現代でその文字を読める人はほとんどいないと思います」

メルフィナが言う。

「そっか。でも一応ありがたく貰っとく」

ロアはそう言ってファイルを懷にしまった。

アムリタが立ち上がろうとするのをエレインが押し止めた。

「いけません。一応大事をとってもう少し休まないと」

アムリタは迷惑そうな顔をしたが、結局エレインに押し切られてその場に横たわっていた。

ここはどこだろう。とても寒い。体が震える。私はゆっくり目を開けた。空に月が光っている。禍々しいほど赤い月。ゆっくりと体を起こす。ずいぶん体が重い。辺りを見回す。どこか外のようなだ。辺りの石盤に赤い血が染み付いている。酷い量だ。誰が血を流したか知らないが、こんな量の血を流したら人は間違いなく死ぬ。

私は何をしてたのだろう。酷い頭痛だ。考えることが辛い。ええっと、ロアを追って、城の

屋上まで来た。そうか、ここは屋上だったのか。どうりで寒いはずだ。そこで倒れているロアを見た。ボールスと名乗る男。そして私は……。

おそろおそろ自分の首に触れる。喉に大きな切り傷がある。ロアを助けるため、自分で付けた傷だ。でももう傷が塞がりかけているのはどういうわけ？

リユネットは立ち上がった。辺りを見回す。もう誰もいない。ロアもボールスも。リユネットはゆっくり歩き出した。

なんだか酷く喉が渴いた。

「あーはっはっは。見つけましたよ、ロア。さあ、此处で会ったが百年目。おとなしくかんねんなさい」

兵士達の死体だらけの中央ホールで休んでいたエレイン達の前にリユネットが姿を現す。

「あいかわらず五月蠅い方ですね……私達は今それどころじゃないんです」

エレインが疲れたように言う。他のメンバーも同様のようだ。しかし、そんな中ロアだけは驚いたようにリユネットを見つめている。

「……生きてたのか」

ロアが呆然と言う。

「当たり前です。神の使徒たるこの私が使命半ばにして死ぬわけないでしょう。そしてその使命とはロア、おまえを地獄に送ることです。そういうわけで覚悟！」

剣を振りかぶって突進しようとしたリユネットだったが、途中で足がもつれておもしろいっけりずっこけた。

「いたたつ。あーっもう、なんかさっきから調子が悪いわ」

座り込んでぶつけた膝を擦るリユネット。そのリユネットにロアが手を差し伸べた。

「まあ、生きてたんなら幸いだ。さっきはサンキューな」

「さっき？何の事です？」

座っているリユネットがロアの顔を見上げる。

「俺がボールスにやられて死に掛けてた時、血を分けてくれただろ」

ロアの言葉を聞いたリユネットは赤くなってプイッと横を向いた。

「ふん……お前が私以外の者に殺されるのが許せなかっただけです……」

リユネットがボソボソと小声で呟く。ロアに手を掴まれ、嫌そうに立ち上がった。

横になっていたアムリタが立ち上がった。

「……もう大丈夫。眩暈も無くなったわ」

「本当に？」

「本当。だから早く行きましょ。でないと此処にもいつ敵が来るかわからないわ」

心配そうに顔を覗き込むエレインにアムリタが言う。

「わかりました。ならそろそろ行きましょか。コーデリア殿達が心配です」

「ちよっと！ 私はコーデリアなんて奴知りもしないし、どうでもいいのよ。それより此処で

ロアとの決着を付けます」

リュネットが剣をロアに向けていった。

「あー、わかった。勝負はこの城から出たら好きなだけしてやるから。まずはこの城から脱出しような。でないとお前の身も危ないし、此処の兵士に勝負の邪魔なんてされたくないだろ」

ロアがそう言うのと、リュネットは考え込んでいたが、

「……わかりました。この城を出るまでは休戦としましょう。ただし、この城から出たら約束通り決着を付けさせてもらいますよ」

リュネットがロアに向ってそう言った。

「ボールス殿……」

第一ミルチア城内部、ボールスの死体を前に、一人呟くラウド。そのラウドの後ろに、一つの影が現われる。

「あうゝボールス様、やられちゃった」

「ルーテネか。一足遅かったようだな……我が輩も、お主も……」

「私たち、これからどうすればいいのかなあ……」

ルーテネの言葉に、何も言わず懷から小瓶を取り出すラウド。それをルーテネに差し出す。

「これは？」

「エレインの血だ。それを持って、ヘンギストを探し出せ。あやつなら、この研究を完成させる事ができるよう」

「でも、ヘンギスト様は生きてるか死んでるかわかんないよ？それでも探すの？」

「あやつは天才だ。そうやすやすと死ぬような愚か者ではない」

「それじゃ、ラウド様はどうするの？前から聞こうと思ってたんだけど、ラウド様って、どうしてボールス様のお助けをするの？」

「ボールス殿は、若くして才ある者だった。魔王のレッテルなど借りず、世界を支配する力があつた。トゥオンやメラガンスのように、まだ魔王が生きているなどと言っている頭の堅い連中や、モードレッドのように魔王のレッテルがないと何もできん小者とは違う新しい力が必要だったのだ……それを助け、見届けるのは、長く生き過ぎた老いぼれの生き甲斐だった。だが、こうなつた以上、我が輩はボールス殿の仇を討たねばならん」

「じゃあ、今から討ちに行く？ 私もコピーが近くに三体くらいいるんだけど……」

「いや、まずはボールス殿の死によつて、混乱するであろう配下の者達を静めねばなるまい。敵を討つのは、それからでも遅くはないだろう」

「ふうん……まあ、ボールス様が殺されちゃったわけだし、ここにいっても仕方ないわけだから、ヘンギスト様散策にいつてきまーす」

ルーテネはそう言つて、早々に影となつて消える。ラウドはしばらくボールスの死体を見つめていたが、闇へと消えていった。

「アルテオム！」

アルテオムの姿を見つけ、大声で呼び止めるコーデリア。

「これはこれは、コーデリア・レキ隊長。私は次期国王だぞ？ 呼び捨てはないんじゃないかな？」

アルテオムが、皮肉を込めて言う。

「貴殿に聞きたいことがある。返答次第によっては……」

「どうだというのだね？『逆賊』コーデリア・レキよ」

「何……？」

アルテオムの言葉に、眉をひそめるコーデリア。

「王を殺すために暗殺者をよこし、ブルーナイツを吸血鬼呼ばわりしたあげく、隊長のトランを殺し、エーデルリッターを集めミルチアに混乱をもたらそうとしている。尚且つ、新たな暗殺者を放ち、私の命まで狙った……違うかね？」

「き、貴様！」

コーデリアが剣を抜く。それを見たアルテオムは隣の部屋へと飛び込む。そして、壁に着いたあるボタンを足で蹴り押す。コーデリアは慌ててアルテオムを追おうとするが、その部屋の入り口に、鉄の扉が落ちてくる。

「くそっ！開けろ！」

コーデリアが叫びながら扉を蹴るが、びくともしない。

「コーデリア殿！アルテオムは……？」

後から来たロットが尋ねる。

「駄目だ……完全に奴のペースだ……このままでは」

その場にしゃがみこむコーデリア。ロットは状況が飲み込めず、立ち尽くしている。

「他の二人は？」

コーデリアが、ロットの顔も見ずに聞く。

「先に脱出してもらいました」

「そうか……ロット殿、エレーン様たちを探し出し、早急に城を脱出していただきたい。できますね？」

「……わかりました。急いで脱出します」

「お願いします」

そしてロットは走り出した。コーデリアは、ゆっくりと立ち上がり、出口へと走り出す。

（腐るな……ここで負けては駄目だ。真実を明かすには、生きねば……!）

コーデリアは息を切らしながら城外へと飛び出す。外では、エーデルリッターが、ブルーナイツの吸血鬼をほぼ片付けていた。

「各隊長、いますか？」

コーデリアの言葉に、ホワイトナイツ、ルビーナイツ、エメラルドナイツの隊長が前へと出る。

「すまない……しくじった。王殺しも、ブルーナイツのことも、すべての罪をかぶせられた。もうじき、兵たちの間にその事が伝わるだろう。そうすれば、私は逆賊として命を狙われる事になる」

コーデリアの言葉に、顔を見合わせる三人。

「投降してくれ。私に脅されていたとも言え、悪いようにはされないだろう……」

「おいおい、待ってくれよ」

ホワイトナイツの隊長が言う。

「俺は、あんなやつ命令聞くくらいなら、逆賊として、ミルチアをもとの姿に戻すために動く方がよっぽどいいんだが」

「私も賛成ね。レキ、これはもうあなたとアルテオムの個人的な問題じゃなくなってるのよ。先代ミルチア王に忠誠を誓った私たちが、あんな男を信じるとおもって？」

ルビーナイツの隊長が、続いて言った。

「我々だけではないぞ。ここにいる者たち、全員が同じ気持ちだ！ 皆、そうだろう？」

エメラルドナイツの隊長の言葉に、兵たちが「おおー！」と、声を上げる。

「みんな……」

泣きそうになるのを必死に抑えるコーデリア。

「で、これからどうするんだよ？」

「あ、ああ……このままここで戦っても、勝ち目はない。一度サンドルークへ撤退する」

「サンドルーク？では、あのヴァルレー大石橋を通るつもりか？あそこは魔物が巣くっていて、危険なところだぞ？」

「押し通るしかあるまい。サンドルークには、ミルチアからの亡命だとも伝えれば、入れてくれるだろう。あそこは中立国だからね」

「ふむ、それではさっそく出発するか……」

「いや、私はあの者達を待たねばならない。皆は先に行ってちょうだい」

そう言って、城を見上げるコーデリア。

「エレイン様は我々が待っていますので、コーデリア殿も行ってください」

そんなコーデリアに、声を掛けるガウエイン。

「了解した。ここを北西にまっすぐ進んでくれ。そうすると、分かれ道がある。そこに数名兵を待機させておくので、後は指示に従ってくれ」

「承知いたしました」

「よし、追っ手がくる前に出発するぞ。全軍、ヴァルレーまで急げ！」

コーデリアの号令に、走り出すエーデルリッター達。

「ロット様たち……無事にできますよね？」

ルーディが心配そうに聞く。

「大丈夫だ。必ず脱出してくる。……何者だ？」

ガウエインが言いながら振り返る。そこには、男が一人立っていた。

「私の名はモリスン。大丈夫、敵ではないよ。おおよその事態は把握している。さて、馬は何頭必要かな？」

ミルチア城内部。エレイン達は、出口へと向かって進んでいた。だが、ロアの怪我、アムリタのまだおぼつかぬ足取りにより、易々とは先に進めない。ミルチア兵に遭遇した時、すでに

ネッコの魔法しか手段がない状況であった。だが、そのネッコの魔力も徐々に消耗しつつあった。

「こんな時、ライオネルやアッドのありがたみでてくるよなあ」

ロアがぼやく。ネッコが横で頷いている。その傍ら、メルフィナは悲しい表情でリユネットの方をみつめていた。

「……メルフィナ、さっきからなんですの？」

リユネットがメルフィナに尋ねる。

「いえ……その……な、何でもありません。ライオネルさんや、アッドさんが無事だとい
なって……」

「そうですね。ライオネル、無事だといのですが……」

エレーンが心配そうに言う。しかし、その表情はすぐに一変した。前方からミルチア兵が押し寄せてくる。

「いたぞ！ やれ！」

「くそっ！ 招雷！」

ネッコが叫ぶ。雷が、兵たちの頭上から降り注いだ。エレーンが剣を抜く。雷で倒れなかった兵や、当たらなかった兵たちが突撃してくる。

「おらあ！」

ロアも蹴りで応戦する。だが、両腕が折れているため、バランスが取り辛く、そのために動

きが悪い。

「一斉にかかれ！」

隊長らしき兵の号令で、三人の兵が一斉にエレインに斬りかかった。それを見たネッコが慌てて詠唱を始める。

（駄目だ、間に合わない！）

エレインが恐怖に目を閉じる。だが、エレインが斬られる事はなかった。エレインが恐る恐る目を開けると、そこには兵をなぎ倒したロットの姿があった。

「エレイン様、無事ですか？」

すでに次の兵を斬り倒しながら言うロット。後ろから「ちっ」というリユネットの舌打ちが聞こえた。間もなく、ロットが最後の兵を倒す。

「ロット殿、助かりました」

「いえ……さあ、早く脱出しましょう！」

一向にロットが加わり、エレイン達が進む速度はかなり速くなった。ロットも伊達に英雄騎士と呼ばれてるわけではなかった。その剣技は見事なもので、次々と兵を倒していく。

そして、彼等はようやくミルチア城一階へと辿り着く。

「さあ、もう時期出口のはずです！ 頑張りましょう」

エレインが皆を励ますように言う。

「なあ、メルフィナの回復魔法で、ネッコの魔力回復したりできないのかよ？」

「回復魔法って、そんな便利なものじゃないんですよ……」

ロアの問いに、呆れた顔で言うメルフィナ。

「回復魔法は傷を癒すものですわ。失われた体力や魔力を回復できるものではないのです。もちろん、病気なども治せませんよ」

リネットがメルフィナに変わって答える。その刹那、爆発音と共に、一人の男が部屋から飛び出てくる。

「ライオネル！」

その男の姿を見て、エレインが叫ぶ。見ると、ライオネルはかなりの手傷を負っていた。その、ライオネルの元に駆け寄ろうと、エレインが走り出す。

「エレイン様、来てはいけません！」

ライオネルが叫ぶと同時に、巨大な装甲蟲が壁を突き破って飛び出してくる。蟲は前足を振りかざし、エレインへと襲い掛かる。しかし、メルフィナがエレインの前に飛び出し、シールドで攻撃を受け止める。

「ロットさん、早く皆さんを外へ！」

「しかし、貴方を一人置いていく事は……」

「皆手負いの方たちばかりです。大丈夫、私に考えがありますので、ロットさんはこのまま皆さんを外までお願いします」

「……わかりました。司祭の貴方が言うならば、大丈夫なのでしょう。さあ、皆は早く外

へ！」

「あ、それからリユネット。貴方は回復魔法を使っではいけませんよ」

メルフィナがリユネットの方を見ながら言う。

「は？何言ってますの？」

メルフィナの言葉に、疑惑の表情で返すリユネット。

「とにかく、使っではいけませんよ！ わかりましたね？」

メルフィナがにっこりと微笑む。それを見たリユネットが、少しだけ肩をびくと震わせた。
「わ、わかりました。そこまで言うなら、使わなくてもよくってよ」

リユネットがたじたと言う。そして、メルフィナを除く全員が走り出す。

「お前、メルフィナが怖いんじゃないの？」

「ば、馬鹿をおっしやい！ 誰があんなやつ……」

笑ってからかうロアに、リユネットが動揺しながら叫んだ。

メルフィナは、彼らが走り去り、姿が見えなくなったのを確認するとシールドを解く。

蟲がもう一度前足を振りかざし、それをメルフィナに向かって振り下ろす。その攻撃を、片手で受け止めるメルフィナ。

「こんな人形で、魔族に勝てるでも思ってるんですか……」

メルフィナが、装甲蟲を蹴り上げる。金属音と共に吹っ飛ぶ装甲蟲。メルフィナは、蟲との間合いを一気に詰め、蟲の顔面に拳を突きたてる。鈍い音と共に、メルフィナの拳が蟲の顔面

にめり込んだ。そして、装甲蟲は動かなくなる。

（装甲蟲……こんなものですか。これなら……）

メルフィナはしばらく動かなくなった装甲蟲を見ていたが、やがて出口へと向かって走り出した。

アルテオムが、ボールスの死体を前に立ち尽くす。

「なん……だと……？」

ボールスの死を目の当たりにして、混乱するアルテオム。

（ボールスが死んだ？あいつらに？いや、まさか……）

目を閉じ、心を落ち着かせるアルテオム。

（そうだ、落ち着け。こいつが死んだからどうだと言うのだ！ 逆に、ボールスが死んでくれれば、こいつに利用される事も、裏切られる事もないだろう）

アルテオムは、にやりとしながら王座へと腰を掛ける。

（フフ……こいつのおかげで、魔王軍は仲間内で鬭争、研究も捗った。しかも、見返りを受ける前に事切れるとは……これで、装甲蟲は私の意のままに扱える。後は、魔族どもとやり合えるだけの戦力を整えれば、世界は我が支配下にあるも同然。異国の者どもには逃げられたが、これだけの騒ぎが起きたのだ。コーデリアが逆賊として、民の間に噂が流れるのも時間の問題。なんだ、すべてうまくいってるじゃないか……）

「アルテオム様、レオグランズに通じる洞窟は、すべて閉鎖しました」

アルテオムのもとに來た兵が、そう告げる。

「そうか。これでエーデルリッターに逃げ道はなくなった。後は時間の問題だな」

「アルテオム様！」

もう一人の兵が、叫びながら駆け込んでくる。

「どうした？」

「ヴァルレー大石橋前に、エーデルリッターと思われる騎士団が集結しているとの報告が入りました！」

「なんだと！？ 奴ら、あそこを渡るつもりなのか……」

腕を組み、考え込むアルテオム。

（なるほど……考えたな。あの橋を渡るのは容易ではないが、万が一逃げられでもしたらどうなる？ いや、待てよ……）

「装甲蟲を用意しろ」

「追いますか？」

アルテオムの言葉に、兵が問う。

「いや、ゆっくりでいい。どうせあの橋を渡るのは不可能だ。引き返せないよう、ヴァルレー前に集結させておけ」

「わかりました」

そう答え、走り出す兵士。

（フフ……ヴァルレー大石橋からの侵略は断念していたが……奴らが魔物どもを片付けてくれれば、こちらとしてもありがたい。それに、王殺しの逆賊を追っていたという理由で、そのまますんだルークの領地に進入できる。これは大きなチャンスかもしれない）

アルテオムは立ち上がり、窓の外を見た。自然に顔がにやついているのに途中で気づく。

メルフィナが外に出ると、一向は馬にまたがっていた。

「あ、メルフィナ。おせーぞ」

「こちらのモリスンという方が、馬を用意してくれたんです」

ロアとエレインが順々に言う。

「モリスン……」

「おーい、メルフィナ、早く行くぞ」

「ごめんなさい、少し先に行っててくれませんか？」

急かすロアに、深刻な表情で言うメルフィナ。

「……何か事情があらいたうですね。わかりました。皆さん先に行つてましよう」

「エレイン様……あらがとうございます」

「ここより北西に走れば、そこに分かれ道がある。我々はそこで待っているからな」

ガウエインの言葉に、メルフィナは頷く。そして、エレインが走り出したと同時に、皆が後

を走り出した。

「……メルフィナか」

「モリスン……私を許してくれますか？」

モリスンは、ゆっくりとメルフィナの方を向き直る。

「メルフィナ、お前は何か悪くはない」

「いえ、あの時、私がパルミラを止めていれば、我々ドラゴン族は、まだまだ戦えたのではないでしょうか……？ 貴方が止めに来てくれたにも関わらず、パルミラは勝手な行動を取り、ラウドに待ち伏せされ、失敗に終わった」

「メルフィナよ、あまり自分とパルミラを責めるな。私はね、パルミラがああの行動を取らなくともドラゴン族は同じ道を通るだろうと思っていた。あのまま戦っても、我々に勝ち目はなかったと思う。パルミラは、誰より早くそのことに気づいたのだろう。だから、自らが最後の賭けに出たのだよ。成功しても、失敗しても命の保証のない行動にな」

その言葉に、メルフィナは俯いたまま黙っていた。

「……パルミラは、まだ眠っているのか？」

ゆっくりと口を開くモリスン。

「パルミラは本当に目覚めるのでしょうか？ 私は都合上ラウドと二度で会いましたが……」

彼女が目覚める気配はありません」

「時期を待っているのか、それとも別に何かあるのか……私にはわからんが、何かあるのだろ

う」

「そうですか……」

「いずれにせよ、ラウドともう一度戦うという意思に、変わりはないのだな？」

「彼女なりの罪滅ぼし……と言ったところでしょいか」

「彼女の意思……か。メルフィナ、お前はどうかのだ？ラウドと戦うとなると、無事では済まん。今度こそ、本当に命を落とすかもしれない。それでもよいのか？」

「私は……」

モリスンの問いに、答えかけて黙るメルフィナ。しばらく俯いたまま、黙り込む。やがて、顔を上げる。

「私は二番目ですから……彼女の思うように……」

北西にある分かれ道のところで、メルフィナと合流し、ブラックナイツの騎士団に連れられ、一向はコーデリアと合流を果たした。

「この橋を渡るのか……」

ライオネルが深刻な表情で言う。

「知っているのですか？ライオネル」

「ええ、この橋は樹海、航海ルート以外に設けられた、サンダルクとミルチアを結ぶ唯一のルートなのですが……魔族の動きが盛んになってからはまったく使われてないと聞きます」

エレインの問いに答えるライオネル。

「橋を渡り終えるのに、三日とかかる。それ故、道中キャンプを張る場所もなく、周りは絶壁、下は海、襲われれば逃げ場はない。それが、使われなくなった理由です」

「とにかく、一氣に駆け抜けるしかないな」

コーデリアに続き、エメラルドナイツの隊長が言う。

「よし、先頭は、ルビーナイツに任せてもらうわ。さあ、行くわよ！」

「エメラルドナイツ、続くぞ！　あまり間隔を詰めすぎるな」

「ホワイトナイツも行くぞ！　前方後方の注意を怠るな」

各隊長が叫び、エーデルリッターは橋を渡り始めた。

「貴方達はどうする？別に、我々と一緒に行かなくてもいいのよ？」

コーデリアが、ロアたちに問う。

「俺達も追われているからな。このままここに残っても仕方ねえ」

「そうですね。レオグランスの方は警戒がすごそうだし……行くしかないですね」

「もともと、サンダルクに行く予定だったんだ。丁度いいよ」

「私は、エレイン様をお守りするだけど」

「我々も、とりあえずサンダルクまで同行させてもらうことにする」

「ロアがサンダルクに行くと言うのなら、それを追わないわけにはいきませんわ」

「……別に反対する理由ないし、行くわ」

「行きましょう、ここにおいても仕方ありません」
皆が順々に言う。

「よし……ブラックナイツ、全軍進軍開始だ！」

コーデリアの号令で、最後尾をブラックナイツが走り出した。

第三章 完